みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

イヌイット語を話す人々
(リレー連載・先住民たちの現在 8)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5780

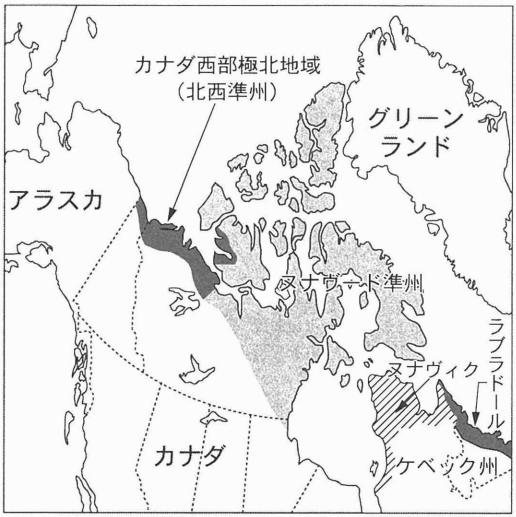
イヌイットの村

［リレー連載］

先住民たちの現在〈8〉

カナダの極北地域の中部から西部にかけての沿岸地域にイヌイットと呼ばれる先住民が住んでいる。かれらの言葉はエスキモー語族に属するイヌクティトゥットであるが、地域ごとにかなりの方言的な差が認められる。２００１年現在、カナダには約４万５０００人のイヌイットがいる。村や町、地域によって違いが見られるが、このうち65％以上の人々がイヌイット語を日常生活に使用している。カナダのヌナヴート準州やケベック州極北部ヌナヴィク地域に話者が集中している。

紀元10世紀ごろにアラスカの沿岸部に出現した捕鯨を基盤とするチューレ文化が、２００年あまりの間に西はチュコトカ半島沿岸部から東はグリーンランドまで広がった。ところが地球の寒冷化が進んだために16世紀ごろには斉一的な文化は地域ごとに適応を遂げ、独自の地域文化が形成された。われわれがイヌイット文化として思い浮かべる雪の家、石製ランプ、犬ぞりなどは、寒冷化が進んだ時期に



カナダの中部および東部極北地域で形成されたものである。そしてカナダの極北地域各地のイヌイットは16世紀から20世紀の前半までに欧米人と接触をはじめ、20世紀の前半にはイギリスの国策会社であったハドソン湾会社らとホッキョクギツネの毛皮の交易をはじめる。さらにキリスト教が広められ、1930年代までにはほとんどのカナダ・イヌイットはキリスト教徒に改宗したといわれている。

第二次世界大戦が終わると、戦略的に重要であった極北地域にはレーダー基地網が作られた。カナダ政府はイヌイットへ行政サービスを効率よく提供し、国民化を推し進めるためにイヌイットの定住化を促進した。1960年代にはイヌイットは各地に作り出された定住村で生活をはじめ、そこを拠点として狩猟やキャンプに出かけるようになった。また、この時期には滑石彫刻や版画の制作が導入され、イヌイットの重要な現金収入のひとつになった。1960年代以降イヌイットは外部から入ってくる物資や食料品にますます依存するようになり、現金を必要とするようになった。

1975年にはケベック州ヌナヴィク地域のイヌイットが、1993年には旧北西準州のイヌイットがカナダ政府と先住民の諸権利に関して協定を結び、新たな歴史を歩み始めた。とくに1999年4月1日にヌナヴート準州が成立したのは記憶に新しい。

イヌイット語を話す人々……岸上伸啓

Kishigami Nobuhiro

わたしのおもな調査地であるケベック州極北部ヌナヴィク地域の現在の生活を紹介してみよう。イヌイットが季節的な移動生活をやめてから50年近くがたち、人口の3分の2以上は産院で生まれた人々である。村にはケベック住宅公社が提供した一戸建て住宅やアパートがあり、イヌイットは賃借りをしている。各住宅はカナダ南部の住宅と基本的には同じで、1室以上の寝室、居間、台所、バス・トイレからなる。暖房完備、電気がついており、水は定期的にトラックで給水されている。キャンプに出るとキャンバス布製のテントやイグルー（雪の家）で寝泊りすることはあるが、大半のイヌイットは一年のほとんどを村の住宅で過ごしている。女性用のねんねこや冬季の外着であるダッフル・コートを除けば、日常的な衣類の大半は、小売店や通信販売で購入された既製品である。気温が10度程度まで上昇する極北の真夏には、ジーンズ、スニーカー、Tシャツ姿のイヌイットを見かけることがある。ただし、冬季に狩猟やキャンプに行く人は、防寒性に富む毛皮服やダッフル・コートを着ている。

今では多くの成人は村役場、生協、学校、看護所、空港などで仕事についている。賃金労働者は、週末や長期休暇、仕事が終わってからの時間を利用してアザラシやカリブーの狩猟やホッキョクイワナの漁労を行っている。もっぱら狩猟・漁労のみに従事している人は、中高年者に多

い。かれらは滑石彫刻を制作・販売した収入や生活補助金、家族の収入を利用してガソリンや銃弾を購入し、狩猟や漁労を行なっている。ハンターはとった獲物を売ることは少なく、世帯を別にする家族や親戚、友人に無償で分配しており、いまでも助け合いの精神は健在である。最近の傾向として、春や夏に1か月以上のキャンプに出かける家族の数がへり、キャンプ地も村から「小型エンジン」付きカヌーで2時間以内の近場にキャンプ地を設けることが多くなった。その一方で、ほかの村やモントリオールなどを飛行機の定期便を利用して訪ねることが多くなってきている。

最近では、生協で購入したパンやチキン、ピザ、ハンバーガーなどの外来の食品を食べることが多くなってきたが、イヌイットが好む食べ物は地元で取れる魚や動物の肉である。それらを煮たり、発酵させたり、干したり、生のままで食べている。村には公立の学校があり、幼稚園児から中学生までが月曜日から金曜日まで通学している。学校では、英語やフランス語、算数、社会、理科、コンピューターの利用などのほかイヌイット語やイヌイット文化も教えられている。

村では衛星放送を利用してテレビ番組を多数見ることができ、カナダ放送によるイヌイット語と英語のラジオ番組を聴くこともできる。ほぼすべての家庭には電話があり、村内外の家族、親戚、友人との連絡に利用されている。また、村の中にあるFMラジオ放送が、村人の間の情報交換で盛んに利用されている点がユニークである。役場や学校ではインターネットが利用されているが、一般家庭までは普及していない。任天堂やソニーのテレビ・ゲームで遊んでいる子供たちも多い。

現在のイヌイットにとって重要なのは、復活祭やクリスマスなどのキリスト教の祭事である。これらの機会には村人が、村の体育館にあつまり、ミサの後、共食会やダンス・パーティーが開催される。ここで踊られるダンスは、スコットランド流のフォークダンスである。これはハドソン湾会社や捕鯨船の乗組員との交流の名残である。

イヌイットは、マスメディアや学校教育、カナダ南部から来た看護師や教師との交流を通して常に英語やフランス語に接しており、多言語世界で生活を営んでいる。この状況は、母語の保全にとって必ずしもよい条件とはいえないが、イヌイット自身がかれらのアイデンティティーの保持には母語が不可欠であることを自覚しており、多くの家庭ではイヌイット語が日常語として話されている。また、先住民の権利として、イヌイット語を学校教育の制度を利用して子供たちに教えている。約20年前と比べると、子供たちがイヌイット語を日常生活で使用する頻度が多くなっている。

イヌイット語を話す人々

◆イヌイット語の特色

シベリアの東端部からアラスカ、カナダをへてグリーンランドにいたる寒冷ツンドラ地域に住んでいる人々の言葉は「エスキモー語」と呼ばれている。エスキモー語の話者は10万人ほどである。この言葉には多数の方言があるが、アラスカ南西部やロシアのチュコトカ半島の沿岸部で話されているユピック語と、アラスカの北西部から以東で話されているイヌピアック語・イヌイット語に大別できる。現在、約4万5000人のカナダ・イヌイットのうちイヌイット語を話すことができる者は約3万人弱である。

イヌイット語（イヌクティトゥット）の特徴は、いくつもの接尾語をつけて1文を1つの単語のようにしてしまうことや、雪や方向を示す単語のように狩猟生活に密接に関係する語彙が数多く存在していることである。例えば、ヌナヴィク地域では雪の総称は無いが、「水を作るための雪」を「アニウ」、「地表上の雪」を「アプット」、「溶けつつある雪」を「マングック」、「降る雪」を「カニク」などとさまざまな状態をあらわす個別の単語が15以上存在している。

発音では、母音が「i」、「u」、「a」の3つしかない。また、フランス語の咽頭音の「r」に似てうがいをするときにのどを震わせて出す「r」音や、のどの奥で発せられる「k」音という難しい子音がある。

挨拶言葉は存在しなかったが、例えば、「朝」を意味する「ウラック」を転用して、「おはよう」を意味する「ウラックート」などが使用されるようになった。また、「ご機嫌いかがですか。」、「はい、元気です。」という会話は、「カヌイッピット？」、「カヌインギツンガ」と表現されるが、これを直訳してみると「病気ですか？」、「病気ではありません」となる。また、断る場合、直接的に「ノー」とは言わず、「アッチューリ」（「わからない」）と婉曲的な表現をとる。20以上の数を表現する単語はないため、英語が援用されている。

冬の漁労

カナダの西部極北地域やラブラドール地域のように英語を日常語として使用しているイヌイットもいるが、ヌナヴィート準州やヌナヴィク地域においては意図的に保全・使用の努力をしているので、イヌイット語が消滅することはないであろう。イヌイットがカナダという多民族社会で生きていくためには、英語やフランス語の習得が必要であるため、若いイヌイットはイヌイット語とともに英語やフランス語を習得しつつある。ケベック州極北部にはこれら3つの言語を自在にあやつるイヌイットも出現している。

（国立民族学博物館／文化人類学）